

備中本隆寺と庚申山

合田憲隆

目次

- 一、現在の庚申山
- 二、庚申信仰
 - 1、あらし
 - 2、由来
 - 3、磐座いわくら
 - 4、太陽祭祀
- 三、本隆寺と庚申山
- 一、現在の庚申山

備中本隆寺のある岡山市新庄には、庚申山という山がある。この山は本隆寺のすぐ北百メートルほどのところ
にあり、岡山市の西部と総社市との境となる標高七十五メートルの山である。この山はもともと三尾山あるいは

岩崎山といったが、現在では「庚申山」、地元の人々は親しみを込めて、「庚申さま」と呼んでいる。山頂からの眺めは、全国第四位の規模を誇る造山古墳や、羽柴秀吉の水攻めで知られる備中高松城跡など、吉備路平野を見下ろすことができる実に素晴らしいものである。その山容も、整った形の円錐形をしている。

また、この山には帝釈天王、大梵天王、鬼子母神などが祀られている。本隆寺蔵の縁起などによると、かつて庚申山には積善寺という真言宗の大寺があったが、天正十年（一五八二）、羽柴秀吉による高松城水攻めの時、毛利軍の将、吉川元春の陣所となり、その兵火により焼失したといわれている。

しかし、本隆寺第七世日正が元禄四年（一六九二）の頃、この山の復興を志し、岩崎山の山頂を買い取り、積善寺の跡地に堂宇を建立して、大梵天王、帝釈天王、鬼子母神などを祀り、これを庚申の神としたのである。その後、庚申信仰の全国的な勃興と共に、新庄の庚申さまとして世に知られ、広く地域の尊信を得るに至り、備中本隆寺はこうして長くこの山を守ってきたのである。

そこで、この備中本隆寺は日隆聖人が西国布教されるにあたりその基礎が築かれていくわけであるが、それ以前よりこの地の人々を見守っていた庚申山について少し見ていきたい。

二、庚申信仰

1、あらまし

庚申信仰とは、地域の人たちがまとまって信じそれぞれ幸せを願う、民間信仰の一つである。この庚申信仰とは、干支の「庚申」かのえさるの日に徹夜をして眠らずに過ごす長生きできると信じられて広まったものである。こ

れは詳しくは後述するが、古代中国の道教の信仰から起ったものが、八世紀後半には日本に伝えられ、その後、仏教や神道、その他の民間の様々な信仰や習俗と交ざり合い、広がったものと考えられている。

信仰を同じくする数軒の人々が集まり行われてきたこの庚申信仰は、娯楽的で親睦的な集まりでもあったために、長く盛んに続いてきたのである。江戸時代頃から盛んに広まったといわれるが、貴族階級などは古く中世以前から行われていたようである。では、それはいつ頃のことなのだろうか。

庚申の夜に眠らずに過ごすという習俗が記録されているもので最も古いものとされるのは、承和五年（八三八）に慈覚大師円仁が記した『入唐求法巡礼行記』であり、

承和五年十一月二十六日 庚辰^マ

夜人皆不睡与本国正月庚申夜同也

とある。

ここでの十一月二十六日とは冬至の前後であり、中国では一陽来復を祈るために冬至の日に眠らずに行った太陽祭祀の習俗があるが、日本でも行われている庚申の晩に眠らずに過ごす習俗と似ている、ということである。¹

また、平安時代の寛平元年（八八九）の作といわれる菅原道真の詠んだ詩の一節が『和漢朗詠集』にある。²

己酉年終冬日少

庚申夜半暁光遲

とあり、この九世紀頃には、庚申の夜に眠らずに過ごすという習俗が定着していたのではないだろうか。

2、由 来

この庚申信仰の起は様々伝えられているが、中国から入ってきた「三尸説」が最も広く信じられているようである。

三尸とは三つの虫ということであり、人間の体内には頭部に住む上尸、腹部に住む中尸、脚部に住む下尸のことである。この三尸虫は、人間が生きている間はその体内に束縛されているが、人間が死ぬと外へ出て自由に振舞えるようになるため、早く人間が死ぬように画策する。それが庚申の夜だけは眠った人間の体から抜け出して天に昇り、人間の寿命を司る天帝、仏教においては帝釈天にその人間の悪事を告げ口し、その人間の寿命を縮めようとするのである。

では、人間は長生きしたければよいのか。それには、日常から善行を積み、悪行をしないことが大事である。しかもさらに、庚申の夜には眠らず、三尸が自分の体から出られないようにすればよいと考えたのである。

この習慣は、中国から伝わった後、平安時代に宮中貴族の間で広まり、次第に民間にも室町時代には伝わっていったようである。長生きのための義務的信仰から、やがて民間に広まると共に、近隣の人々と会食し、雑談し、宴会を催すなど娯楽的信仰となっていたのである。

3、磐 座

この庚申山に登ると、そこらかしこに巨岩が散在しているのが見られる。何故こんな所にこんな大きな岩があ

るのかと不思議に思うくらいの大きさである。特に、頂上付近にある大梵天王社殿の脇には、高さ六メートル、幅五メートルほどで最も大きいものがある。この巨岩には、延宝元年の年次で、お題目とその左に南無帝釈天王、右に南無大梵天王と刻まれている。またその岩の裏手にも一回りほど小さいが、毘沙門天王が彫り込まれた、高さ四メートル、幅三メートルほどの巨岩もある。

これらは、古代の磐座ではないかと考えられている。古代の人々は、大雨・洪水・台風・凶作など自然の猛威に対して抱く、恐怖、畏怖の念は、科学的解明の進んだ現代とは比べものにならないものであった。このような自然に対して、人々は神々に捧げものをしたり、祭祀の施設を建てるなどして、どうにか荒ぶる自然を鎮めてもらおうとした。自然に存在するもの、例えば樹木・岩石・湖沼など、それが巨大であればあるほど、それらには神が宿ると考えられ、神聖なものとして崇められ、信仰し、祭祀をすることで自然を治め、さらには自分たちの願いを叶えてもらおうと祈ったのである。このように神に祈るとき、神の降臨する依代として最も簡便なものが榊であるが、そのような一時的なものではなく、自然に元々ある巨岩が神の降臨する依代として崇められたもの、これが磐座である。

さらに時代が下って仏教が伝来すると、その磐座に経文や仏像が彫り込まれることがあり、また元々祭祀を行っていた場所に寺社が建てられる例が日本各地に数々見られる。何の価値もないところに寺社を建立するはずがなく、そこに人工的建築物があるということは、元来その場所が聖なる地であったと考えられるのである。

この庚申山においても、巨岩が元々あったのか、わざわざこの場所に持ってきたのか。いずれにしても、この場所で神に祈る何らかの祭祀が行われて、聖なる地であったからこそ、現在のように社殿が建てられていったのであろう。

では、この庚申山においてはどのような祭祀が行われていたのであろうか。

4、太陽祭祀

古代における人々にとって、農耕や採集のため時を知るということは大変重要なことであり、また各地方の支配者にとって大切な役目であった。それを日の出によって知り、その太陽が山から昇り山頂の磐座を照らす、このことが神の降臨と考えたのである。中でも特に、昼間の最も短い冬至の日は、衰微した太陽の復活、一陽来復を祈る日としても重んじられたのである。

古代中国においても、天子自らが冬至の太陽祭祀を行っていたようであり、こうした影響を日本も受けていたようである。この冬至の太陽は、真東から約三十度南に寄った所から昇ることが知られており、これを仮に「冬至の日の出線」と呼ぶが、ある地点から日の出を見たときに、聖なる山から昇る日の出を拝んで、今日が冬至であると時を知ったのである。よって、元々自然にある聖なる山に対して、日の出を拝むある地点も同様に聖なる地ではなかったかと考えられるのである。

奈良県の三輪山は、なだらかな美しい円錐形をした山である。この山が大和国の一宮神社の大神神社の神体山で、この地域での特別聖なる山である。この山に対して北西の位置には「岩見鏡いわみかがみ作神社」があり、この神社からの「冬至の日の出線」が、まさにこの三輪山山頂に当たるのである。⁽⁴⁾このことは、単なる偶然にすぎないかもしれないが、古代の人々はこの「冬至の日の出線」を意識してこの神社を建てられたのであろう。『古事記』にある天の岩屋の神話も、冬至の頃の衰微した太陽の復活を祈るものであり、「鏡」「鏡作」とはまさに古代の人々の太陽祭祀を表している。

この大和国と同様に吉備国においては、「吉備の中山」が古代から神のまします山、聖なる山として崇められていた。『古今集』『枕草子』など平安時代以降の歌集や古典などにもその名が見られ、地方の山であるにもかかわらず名が知られていた。備前国の一宮吉備津彦神社、備中国の一宮吉備津神社が、この山を背にし建てられている。備前国、備中国は、現在の岡山県南部で東西に百キロほどに長く延びた地域である。しかし、その一宮が共に両国の境であるこの吉備中山の麓にあるということは、いずれの神社も背後にあるこの吉備の中山を神体山として建立されたものであり、この山がいかに神聖視されていたかが分かる。

その吉備の中山に対して、この庚申山も聖なる地であると考えられる。というのも、この山から冬至の日の出を見ると、吉備の中山の現在ではちょうど鉄塔が建っている山頂から日の出が昇っていくのである。よって、庚申山山頂の巨岩はその冬至の日の出を拜む磐座ではなかったかと考えられる。

さらに付け加えるならば、全国第四位の規模を誇る造山古墳が、この庚申山の真南約一キロのところに築造されたというのも決して無関係なことではなく、この庚申山を意識したものだと考えられる。大和国の箸墓古墳も聖なる山、三輪山の麓に位置しており、この古墳は三輪山を意識して築かれたとされている。これと同様に、その地域の有力者を葬る古墳を築く際に、その場所の選定は極めて重大なことであったはずで、何も意味のない場所が選ばれるとは思えない。古墳築造の土木工事のために足守川の水運を利用したことと同時に、聖なる山である庚申山の位置も考慮して、あの位置が選ばれたのではなからうか。

三、本隆寺と庚申山

『岩波仏教辞典』に、日待ち・月待ちも庚申信仰の習合したものとあり、前項までに述べてきたように、庚申の夜に眠らずに過ごす習俗と、冬至の日の出を拝むために夜眠らずに過ごすというこの習俗が共通性を持ったものではないかと考えられる。古代において時を知るために、この地の有力者がこの庚申山から吉備の中山に昇る冬至の日の出を拝んでいたのではないか。したがって、この庚申山も聖なる地として崇められていたのではなからうか。その後、時代は下って仏教が伝わり、この聖なる地には寺社が建立され、縁起などに見える積善寺がその一つで、その後、帝釈天王などが法華勧請されたのである。

以前拙稿において、⁽⁵⁾日隆聖人がこの備中本隆寺に至ったのは陸路山陽道ではなく、海路により舟で児島湾から足守川を遡上して来られ、ちょうどこの庚申山の東側の所にあつた、備中十二ヶ郷用水路の堰である岩崎の亀石の付近で足止めされたのでは、と考えた。この付近は、足守川、前川、血吸川の合流するところでもあり、遡上する舟にとって特に難所であつたことからもなおさらのことである。このことから偶然的な到達であつたと考えられるが、それに対して、この地は必然的な目的地ではなかつたかとの一考察をしたい。何故、数ある河川の中でこの足守川を遡上されたのかと考える時、ここ聖なる地、庚申山を目指して来られたのではないかと推測するのである。この吉備の国において、中央でも名の知れた吉備の中山に対する聖なる山であるこの庚申山を目的地として選ばれて、この新庄の地にまで来られたのではないだろうか。

註

- (1) 『庚申信仰』二〇頁
- (2) 『庚申信仰の伝播と縁起』二二頁
- (3) 『祭祀から見た古代吉備』五七頁
- (4) 『方位読み解き事典』六一頁
- (5) 「興隆学林紀要」第十二号所収

参考文献

- 『庚申信仰』平野実 角川書店 昭和四十四年
- 『庚申信仰の伝播と縁起』五十嵐文蔵 小学館スクウェア 平成十四年
- 『岡山県の庚申信仰』小出公大 平成四年
- 『方位読み解き事典』山田安彦 柏書房 平成十三年
- 『吉備の中山』と古代吉備』薬師寺慎一 吉備人出版 平成十三年
- 『祭祀から見た古代吉備』薬師寺慎一 吉備人出版 平成十五年

〈キーワード〉

備中本隆寺

庚申山

庚申信仰

磐座

太陽祭祀